

「エルサレムのために嘆く」

2015年09月18日

ルカによる福音書13章31節～35節。ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることのない。」

主イエスと弟子たちの宣教団はいよいよ都エルサレムに近づいた。その時、ファリサイ派の人々が近寄ってきて、「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」と警告した。ファリサイ派の人々は主イエスと敵対し、命を狙っていたが、ある人々は隠れて敬意を持ち、活動を陰で支援していたのであろう。彼らは領主ヘロデの殺意を密告した。ヘロデは、主イエスは自分が首をはねた洗礼者ヨハネの生まれ代りであると恐れ、主イエスの活動が社会を変革しかねないと警戒していた。彼もまた、主イエスを亡き者にしたいと企んでいたのである。ファリサイ派の人々の警告に対し、主イエスは「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい」と答えている。ヘロデを「狐」と言っている。狐は「狡猾」の形容詞であるが、「小心者」という意味にも使われている。ヘロデは小心者で、主イエスを殺す力量はない。主イエスは「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ」と、日々使命に向かって生きると言い切り、ガリラヤの領主であるヘロデによる殺害はないと明言し、エルサレムでの死を予告している。

そして、都エルサレムのために深い嘆きの言葉を語られた。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ」。神の言葉を語る真実な者たちが遣わされたが、エルサレムは彼らを迫害し、石で打ち殺した不信の町である。主イエスは、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、お前たちを神の祝福の下に幾度も集めようとしたけれども、応じようとしなかった。だから、お前たちの家（エルサレム）は見捨てられる。「言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることのない」と断罪された。「主の名によって来られる方に、祝福があるように」という言葉はエルサレム入城の時に民衆から発せられた言葉であるが、ここで言われている「時」とは主イエスの来臨の時を指している。歴史の終りまで、キリスト（救い主）を見ることはないとの厳しい裁きを語っている。マルコ福音書とマタイ福音書は、葉ばかり茂ったいちじくの木が主イエスの「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように」という一言で、一夜にして枯れたと記している。実をつけず、葉ばかりのいちじくの木は宗教的に荘厳で、経済的に豊かさを顕示しているエルサレムのことであろう。虚飾の町は滅びると主イエスの嘆きを伝えている。